

領域：「音楽リズム」に関する幼児の遊戯行動

深山 千穂子

(女子聖学院短期大学)

幼児教育 音楽リズム 遊戯行動

はじめに

人間の健全な社会生活に、最も重要な要件は、心身の調和のとれた発達であると言われている。

ところが日本では、知的な活動—ことに学業成績—について、異常と思える程の関心が幼児期から持たれている。

人間の価値が、成績で決められるかのように錯覚され、学業における競争が激化している。しかし、人格形成や精神発達に最も大切な役割を果たす、基本的な生活習慣の自立や、自主性、創造性、感受性などを伸ばすことは軽視される傾向にある。

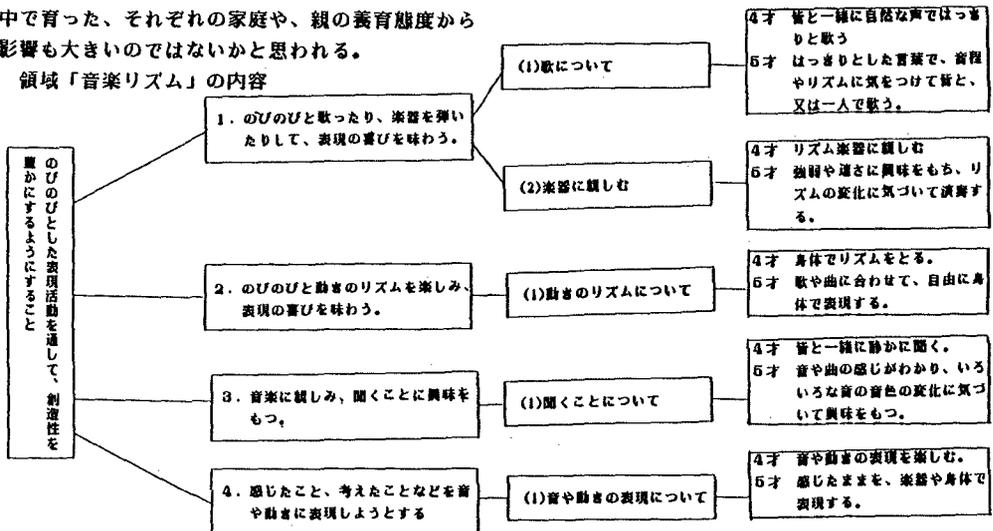
特に幼児期は、その後の人格形成や精神発達の基礎を築く時期であると言われている。したがって、幼児期をいかに過ごしてきたかが、その後の人間性に大きな影響を与えることになる。

一方、現在の大学生を見ていると、当然これまでに身につけておくべき、基本的な生活習慣や、社会性を初めとして、生活全般にわたる行動や言動が、その年齢や身体の発達に比べて、アンバランスである場合が多いように見受けられる。

音楽リズムの分野に関連した活動においても同様で、自主性や想像力に乏しく、感性が磨かれていない学生が目立つ。表現についても、画一的で、型にはまっており、リズムについても、身体の中から出てくるような、自然なリズム感をもつ学生は、極めて稀である。

それらの原因としては、学生達の育った時代や、社会環境もあるが、それに加えて、彼らが、その出生から現在までの中で育った、それぞれの家庭や、親の養育態度から受けた影響も大きいのではないと思われる。

図1 領域「音楽リズム」の内容



目的

本研究では、現在の大学生の幼児期における6領域から見た行動について調査し、学生達の現在の音楽に関する活動と、幼児期の活動との関連を見ながら、どこに、どのような問題があるのかを探る。そしてそれらの問題の原因を考察する。

1. 幼児期における、音楽リズムの重要性

1. 音楽リズムとは

幼稚園教育の目的・目標を達成するための、具体的なねらいを、幼稚園教育要領では、六つの領域に分類している。その中で、音楽、動きのリズムに関する領域をまとめて、音楽リズムという。したがって、「音楽リズム」は、幼稚園教育の中だけで用いられる名称である。

領域「音楽リズム」の基本方針は、図1に示すように、のびのびとした表現活動を通して、創造性を豊かにすることである。幼児の表現している過程を尊重し、外部から押しつけたり、型にはめたりせず、又、大人の基準で判断したり、結果のみを問題とすることなく、表現活動ののびのびと、楽しく行わせているうちに、自然に創造性が芽生え、豊かになっていくとするものである。(1)

2. 幼児期と音楽活動

幼児期の活動の特徴は、音楽活動をも含めて、遊びと結びついていることであろう、

遊びは、子どもの興味と関心を中心として、自発的に行なわれる活動(2)であり、子どもは遊ぶことによって、知

能を伸ばし、運動能力や情操を養っていく。

一方、幼児の音に対する興味は、身の廻りのあらゆる種類の音に向けられており、幼児は、音や音楽を全身で受けとめ、反応する。

このように、幼児は日常生活の中でさまざまな音やリズムを、楽しみながら、身体全体で受けとめる経験を繰り返すことによって、聴く力や、感じる力—感受性—を育てていく。(3) この聴く力や感じる力は、音楽活動の重要な要素でもあり、豊かな感受性は、音楽性や、豊かな精神活動にもつながっていく。

そして、遊びの中での音楽活動は、空想の世界を広げたり、リズムを楽しんだり、身体で表現したりすることにより、創造性、即興性、思考力、集中力、持続力を養う。また、音楽を介して、相手とかかわりあひながらの活動は、自主性、思いやり、責任感といった社会性も身につけていくと思われる。

このような意味からも、幼児期における、豊富な音楽活動の経験は重要であると言える。

II. 領域「音楽リズム」の調査結果

音楽リズムに関する質問は、6項目あり、それぞれ、

(1)ハイ、(2)トキドキ、タマニ、(3)イエ、で答える。

調査対象 M短大(女子) 119名、親 96名

S短大(女子) 235名、親 182名

M大学(男子) 108名

調査日時 昭和61年7月

それぞれの項目の集計結果は、図2～図7の通りである。

図2 お母さん自身何かの楽器を弾くことはありましたか

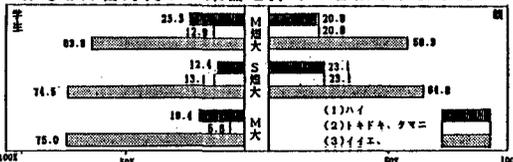


図3 お母さんと一緒に童謡を歌ったり聞いたりしましたか

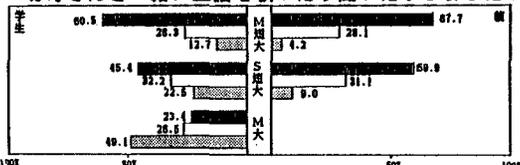


図4 何か楽器を弾くことはできましたか

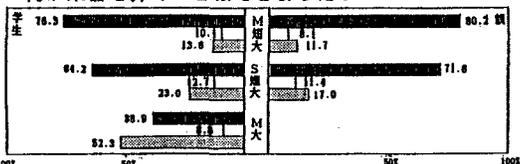


図5 曲に好き嫌いを示すことができましたか

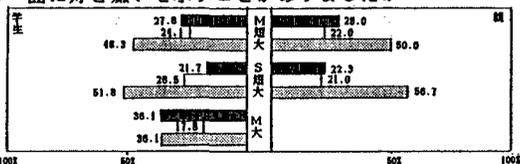


図6 曲に合わせて歌ったりハミングする方でしたか

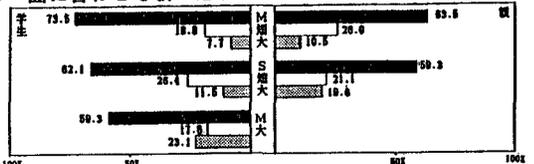
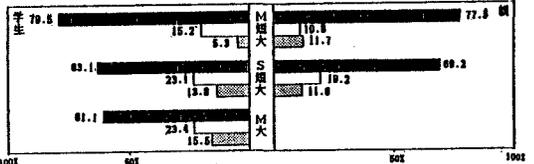


図7 音の高低や強弱はわかりましたか



1. 集計基準から(属性による差)

(1)男女差

図2～図7でも明らかのように、女子大である、M短大とS短大は、回答の比率がほぼ同じような傾向であるが、男子のM大は、項目によって、女子とは全く異なる。

男女差に開きが見られたのは、親子で一緒に歌う項目と、子供が楽器を弾ける項目で、ハイとイエの比率が逆転している。

ハイと答えた比率を比べて、男子が女子を上まわるのは、親が楽器を弾く項目と、曲に好き嫌いを示すことがあるの項目である。しかし、親が楽器を弾く項目では、女子のS短大の比率が低いために、女子全体の比率が低くなっており、男女差というより、学校差であると考えられる。

親子で一緒に歌う項目と、子どもが楽器を弾けるの項目では、比率の差に開きが見られることから、今回の調査では、女子の方が男子よりも、幼児期においては、活発な音楽活動をしていてことがわかる。

(2)親子の差

何れの項目もM短大、S短大共に、ハイと答えた親子の比率には、差が見られない。それぞれ1～2項目、僅かに(3%以内)学生の比率が、父母の比率を上まわっているほかは、父母の比率の方が高い。

これは記憶の違いと共に、質問に対する判断基準の相違などによるものであろう。

(3)学校差

女子大であるM短大とS短大を比較すると、いずれの項目においても、親子共に、M短大の方がハイと答えた比率が高く(7.9%～16.4%)、イエと答えた比率は低い。(3.5%～8.5%)これは、学生の居住地、親の養育態度、おけいごとなどの違いが関係していると思われる。

(4)兄弟数による差

母親が楽器を弾く項目では、学生は、M短大、S短大とも、兄弟数が増えるに従い、イエの比率が高くなる。M大では殆ど差は見られない。(図8)ところが、父母は逆に、兄弟数が増えるに従い、イエの比率が減っていく。(図9)この相反する結果は、どのように解釈すればよ

いのだろうか。

親子で一緒に歌う項目では、学生の女子は、兄弟数が増えるに従い、ハイと答えた比率が減っていく傾向にある。

(図10)

兄弟数と音楽活動との相関は女子に多く見られ、男子には殆ど見られない。

図8 親が楽器を弾く (イエ、学生) 図9 親が楽器を弾く (イエ、父母) 図10 親子で一緒に歌う (学生)

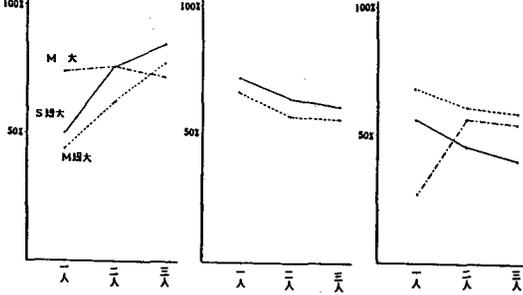


図11 親の養育態度による差 (S短大父母)

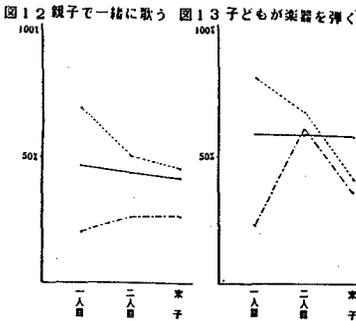
養育態度	親子で一緒に歌う	子供が楽器を弾く
保護的、服従的 溺愛的、受容的	65.2%	74.1%
放任的	39.1%	39.1%
全体	59.9%	71.6%

(5) 親の養育態度による差

親の養育態度を、大きく2つに分けて、音楽活動との関連を見ると、放任的な親の場合、子どもの音楽活動が少なくなることがわかる。

(6) 出生順位から見た差

出生順位を、一人目、二人目、末っ子とわけて、親子で一緒に歌う項目と、子供が楽器を弾ける項目についての差異を見た。(図12、13)



どちらの項目についてもM短大は、末っ子になるに従い、比率ははっきりと減っていく。S短大は僅かに減っていき、M大では、全く違った傾向を示す。出生順位から見ると、女子の場合は、これら2つの項目に相関関係が見られるが、男子の場合は、見られない。

2. 活動を規定する条件の違いから

(1) 親が楽器を弾く場合

楽器を弾ける親の場合、子どもと一緒に歌ったり、子どもが楽器を弾ける比率は高くなると思われるが、調べてみた。(図14-1、14-2)

図14-1 親が楽器を弾ける場合、弾けない場合

学校	条件 活動	楽器を弾ける親	楽器を弾けない親	一緒に歌う 全体
		一緒に歌う	一緒に歌う	
M短大		90.0%	56.9%	67.7%
S短大		81.4%	49.2%	59.9%
M大		*	16.5%	23.1%

図14-2

学校	条件 活動	楽器を弾ける親	楽器を弾けない親	子供が楽器を弾ける
		子供が楽器を弾ける	子供が楽器を弾ける	
M短大		80.0%	74.9%	80.2%
S短大		93.0%	64.1%	71.6%
M大		*	30.7%	38.9%

* 標本数が少な過ぎる

図14-1、14-2に示すように、楽器を弾けない親の場合よりも、子どもの音楽活動は活発になることがわかる。

(2) 親子で一緒に歌う場合

一緒に歌う親子の場合も、そうでない場合よりも、子どもの音楽活動は活発になると思われるが、図15-1、2、3、4のような結果となった。

図15-1 親子で一緒に歌う

学校	活動	子どもが楽器を弾ける	全体
M短大		91.7%	80.0%
S短大		82.2%	71.6%

図15-2

学校	活動	曲に好き嫌いを示す	全体
M短大		32.2%	30.2%
S短大		29.9%	22.3%

図15-3

学校	活動	曲に合わせて歌ったり、ハミングする	全体
M短大		67.2%	63.5%
S短大		69.8%	59.3%

図15-4

学校	活動	音の高低や強弱がわかる	全体
M短大		81.4%	77.5%
S短大		77.6%	69.2%

(3) 子どもが楽器を弾ける場合

子どもが楽器を弾ける場合に、他の音楽活動がどのような傾向を示すかは図16-1、2、3の示す通りである。

以上の結果から、幼児期における音楽活動は、それぞれ相互に関連していることがわかった。

図16-1 子どもが楽器を弾ける場合

学校 \ 活動	曲に好き嫌いを示す	全体
M短大	38.8%	28.0%
S短大	29.6%	22.3%

図16-2

学校 \ 活動	曲に合わせて歌ったり、ハミングする	全体
M短大	67.9%	63.5%
S短大	68.3%	59.3%

図16-3

学校 \ 活動	音の高低や強弱がわかる	全体
M短大	83.1%	77.1%
S短大	74.6%	69.2%

III、考察

今回のM短大、S短大、M大の調査では、それぞれの大学の立地条件、学生の質の差、標本数の差などもあって、同年代の学生達と、その父母を対象とはしているが、必ずしも出てきた数字のみを比較することは困難であると考えられる。このことを前提としながら、考察を進める。

全体的に考察すると、母親が楽器を弾けたり、親子で一緒に歌う家庭では、他の音楽活動も活発であることがわかる。又、男女差、兄弟数、親の養育態度、出生順位によっても、子どもの音楽活動に違いが見られた。

これらのことから、幼児期における子どもの音楽に対する興味や関心は、家庭の中に音楽を楽しむ雰囲気があるかどうか、音楽に対する親の関心度によって左右され、音楽活動につながっていくことがわかる。

幼児は、音やリズムを全身で受けとめ、反応する⁽⁴⁾と言われている。したがって、曲に合わせて歌ったり、ハミングし、身体を動かすことは、幼児期の特色である。ところがこの調査では、このような活動をしていたという答えは、50~70%台にとどまっている。しかも他の音楽活動が活発な子どもの場合にも、その比率は殆ど変わらない。

一方、音や、音楽に対する興味や関心があれば、音楽活動に際しても、なぜ、どうしてという質問がなされるはずである。しかも、3~4才は、質問期であると名付けられる程⁽⁵⁾、なぜ、どうしての多い時期と言われている。しかし、今回の調査では、言語の領域に関連した、「なぜ、どうしてという質問が多かったですか」という質問項目に、30~50%台しか、ハイと答えていない。

幼児期の発達の特徴として、広く認められている事実

反する、この二つの結果は、質問に対する判断基準の相違も原因となっているかもしれないが、それだけとは言えない。幼児期における自立性が育たないため、あらゆる物に対する、なぜ、どうしてといった好奇心に乏しかったのではないだろうか。そして、その原因の一つとして、今回の調査の対象となった学生達が幼児期であった、昭和40年代の社会的背景が考えられる。この時代は、テレビの子ども向け番組が急激に増加し、充実、強化された時代でもあった。そのような時代にあって、テレビの見方に対する適切なしつけが行われなかったのではないだろうか。テレビ視聴において、子ども達は、常に受身であり、相手との対話もなく、感情も育つとは考えられない。したがって、自発性や好奇心も育ちにくくなり、刺激に対する反応も鈍くなる。

このようなテレビの影響のほかにも、子どもの生活している場に騒音や雑音も含めた多くの音が氾濫し、幼児の感覚が鈍くなってきていることも、原因として考えられる。

したがって、幼児期において、親や保育者は、子どもの発達を考慮しながら、子どもにとって大切なものは何であるかを考えて、感性を育てる環境を整えること、親や保育者自身も心から音楽を楽しみ、子どもと共に楽しむことが、子どもの音楽活動を活発にしていくために必要であろう。このような経験を繰り返すことにより、子どもは感受性を養い、豊かな精神生活へと入っていくことができる。又、全ての発達の基礎となる自主性を育てることに、注意の目が向けられなければならない。

現在の学生達も、身体全体で音やリズムを感じ、反応すること、それらが、喜びにつながることを経験しておかなければ、将来、親や保育者となった時、又、同じ事を繰り返していくかもしれない。

これは学生達を教える立場にいる人間の一人として、私自身の今後の課題でもある。

(引用文献)

- (1)文部省編 幼稚園教育指導書 領域編 音楽リズム
フレーベル館 1986 P.4
- (2)深谷昌志、深谷和子著 遊びと勉強
中公新書 1986 P.82
- (3)新保育内容講座5 音楽リズム
光生館 1982 P.11
- (4)同上 P.13
- (5)山下俊郎著 幼児心理学
朝倉書店 1986 P.252